

## 卷八の編纂と家持

### 序

『万葉集』卷八の編纂<sup>①</sup>は、従来、材料となる資料を想定しながら、その偏向性に目を向け坂上郎女の関与が指摘・強調され、家持の追補が論じられてきた。

ただし、核となる資料といってもその実態は必ずしも明確なものではない。また、卷八の形成に関わるすべてを無前提に「編纂」と呼び、議論が揺れている。従来の編纂論がなかなかかみ合わなかった主な原因は、ここにあるかと思う。

そこで筆者は、卷の「編纂」に関して、「一卷がおおよそ今の形に編まれる時点」を「卷の編纂」と称し、それ以前に議論されてきた断片的な歌のまとまりをすべて「資料」と位置づけてみようと思う。そうすることで、「編纂」という言葉は、本来的な意味を取り戻すことができるのではないかと考える。その上で、最終的に誰が歌巻をまとめたのかという点で、諸説を一覧すると「大伴家持」の名をもって統一

することができるように思われる。

ここではひとつの試みとして、卷八に蒐集整理された家持歌の在り方を吟味しながら当該巻の編纂についてひとつの見通しを立ててみたいと思う。

### 二、「四季十雑歌」の編集と家持

「一卷がおおよそ今の形に編まれる時点」に卷の編纂を求めた場合、その構想は次の部立によくうかがわれる。

- 春雑歌（一四一八～一四四七）
- 春相聞（一四四八～一四六四）
- 夏雑歌（一四六五～一四九七）
- 夏相聞（一四九八～一六〇五）
- 秋雑歌（一五一一～一六〇五）
- 秋相聞（一六〇六～一六三五）
- 冬雑歌（一六三六～一六五四）
- 冬相聞（一六五五～一六六三）

市 瀬 雅 之

（梅花女子大学助教授）

当該巻の大きな特徴は、雑歌と相聞等に区分されてきた歌を、さらに季節という時間をも視野に含めて分類している点をあげられる。ここでは、まず「雑歌」部に配置された家持歌の在り方を考えてみたい。

次に考察の対象とする家持歌の題詞を一覧してみた。

【春雑歌】

○大伴宿祢家持鶯歌一首 (8・一四四一題詞)

○大伴宿祢家持春雉歌一首 (8・一四四六題詞)

【春相聞】

○大伴宿祢家持贈坂上家之大嬢歌一首 (8・一四四八題詞)

○大伴家持贈和歌二首 (8・一四六二、六三題詞)

○大伴家持贈坂上大嬢歌一首 (8・一四六四題詞)

右従久迹京贈寧樂宅

【夏雑歌】

○大伴家持霍公鳥歌一首 (8・一四六七七題詞)

○大伴家持橘歌一首 (8・一四六七八題詞)

○大伴家持晚蟬歌一首 (8・一四七九題詞)

○大伴家持唐棣花歌一首 (8・一四八五題詞)

○大伴家持恨霍公鳥晚喧歌二首 (8・一四八六、八七題詞)

○大伴家持權霍公鳥歌一首 (8・一四八八題詞)

○大伴家持惜橘花歌一首 (8・一四八九題詞)

○大伴家持霍公鳥歌一首 (8・一四九〇題詞)

○大伴家持雨日聞霍公鳥喧歌一首 (8・一四九一題詞)

○大伴家持霍公鳥歌二首 (8・一四九四、九五題詞)

○大伴家持石竹花歌一首 (8・一四九六題詞)

【夏相聞】

○大伴家持攀橘花贈坂上大嬢歌一首〈并短歌〉 (8・一五〇七、〇九題詞)

○大伴家持贈紀女郎歌一首 (8・一五一〇題詞)

【秋雑歌】

○大伴家持白露歌一首 (8・一五七二題詞)

○大伴家持和歌一首 (8・一五五四題詞)

○大伴家持和歌一首 (8・一五六三題詞)

○大伴家持和歌一首 (8・一五六五題詞)

○大伴家持秋歌四首 (8・一五六六、六九題詞)

橘朝臣奈良麻呂結集宴歌十一首

(8・一五八一、九一題詞)

○右一首内舍人大伴宿祢家持

以前冬十月十七日集於右大臣橘卿之舊宅宴飲也

○大伴宿祢家持到娘子門作歌一首 (8・一五九六題詞)

○大伴宿祢家持秋歌三首 (8・一五九七、九九題詞)

右天平十五年癸未秋八月見物色作

○大伴宿祢家持鹿鳴歌二首（8・一六〇二〜〇三題詞）

右二首天平十五年癸未秋八月十五日作

○大伴宿祢家持歌一首（8・一六〇五題詞）

【秋相聞】

○大伴□家持至姑坂上郎女竹田庄作歌一首

（8・一六一九題詞）

○大伴宿祢家持報贈歌一首（8・一六二五題詞）

○又報脱著身衣贈家持歌一首（8・一六二六題詞）

右三首天平十一年己卯秋九月往來

○大伴宿祢家持攀非時藤花并芽子黄葉二物贈坂上大嬢歌

二首（8・一六二七〜二八題詞）

右二首天平十二年庚辰夏六月往來

○大伴宿祢家持贈坂上大嬢歌一首〈并短歌〉

（8・一六二九〜三二題詞）

或者贈尼歌二首（8・一六三三〜三四題詞）

○尼作頭句并大伴宿祢家持所誂尼續末句等和歌一首

（8・一六三五題詞）

【冬雜歌】

○大伴宿祢家持雪梅歌一首（8・一六四九題詞）

【冬相聞】

○大伴宿祢家持歌一首（8・一六六三題詞）

すぐに気づくことは、家持の名に「宿祢」の有無が混在していることであろう。中西進氏は、「宿祢」の記されていない

い題詞の歌を家持の増補とされた。

しかし、家持の「歌日記」或いは「歌日誌」と呼ばれる巻十九の末尾には、家持自身の書名とみられる次の記述が認められる。

春日遅々に鶺鴒正に啼く。悽惻の意、歌に非ずは撥ひ難きのみ。よりてこの歌を作り、もちて締緒を展ぶ。但しこの巻の中に作者の名字を僞はずして、ただ年月所処縁起のみを録せるは、皆大伴宿祢家持が裁作る歌詞なり。

（19・四二九二左注）

右の記述の中において、家持は自身の名に「宿祢」を記している。「宿祢」の省略だけでは、直ちに家持の増補を導き出すのは難しかりう。記述の差異は、残された資料の性質や状態を意味するものであり、編纂者の歌にしても複数の資料を組み合わせて編まれている様相が知られる。資料として書き留められた歌に、必要以上の加筆をしないのが『万葉集』の基本的な編纂態度であることを思い返すと、家持が自身の歌だからといって、不足部分に「宿祢」を加筆することを考える必要はないとすると考える。

さて、当該巻は収載歌を季節分類しながら、さらに雑歌と相聞とに分類されている。ここでは先に「雑歌」に分類された家持歌を見てみよう。次に示すように、六首を除いて季節を感じさせる景物をモチーフとする記述が目につく。

馬（8・一四四一題詞）

渡瀬昌忠氏は、「人名十季節十歌何首」の題詞形式で記された歌を、「雑歌」部の原形とみなされた。しかし、題詞に

渡瀬昌忠氏は、「人名十季節十歌何首」の題詞形式で記された歌を、「雑歌」部の原形とみなされた。しかし、題詞に

春雉 (8・一四四六題詞)

霍公鳥 (8・一四六七題詞)

(8・一四八六〜八七題詞)

(8・一四八八題詞)

(8・一四九〇題詞)

(8・一四九一題詞)

(8・一四九四〜九五題詞)

橋(花) (8・一四七八題詞) (8・一四八九題詞)

晚蟬 (8・一四七九題詞)

唐棣花 (8・一四八五題詞)

石竹花 (8・一四九六題詞)

白露 (8・一五七二題詞)

秋 (8・一五六六〜六九題詞)

鹿鳴 (8・一五九七〜九九題詞)

雪梅 (8・一六〇二〜〇三題詞)

雪梅 (8・一六四九題詞)

題詞に季節のモチーフを詠み込んでいない家持歌

(8・一五五四題詞)

(8・一五六三題詞) (8・一五六五題詞)

(8・一五九一題詞) (8・一五九六題詞)

(8・一六〇五題詞)

そうした記述様式を定めていたのなら、書き加えてた者たちが、その様式の統一に注意を払わなかったことに大きな疑問を残す。『万葉集』全体を見回しても、題詞の記述は、書き留められた段階の記述が尊重されて使用される傾向にあることを鑑みると、当該巻のみがその方法を無視して、題詞の統一を図ったとも考えがたい。むしろ、題詞が季節を感じさせるモチーフを書き留めているのは、当該巻の編纂者が、「雑歌」部を作るために歌を蒐集した際に、題詞に季節を感じさせる景物が記されていることを一つの目安にしたためと考えられる。

例えば、「雑歌」を部立に持つ巻三と比較してみよう。巻三「雑歌」部には、右に示した季節を感じさせる詞句を含んだ題詞の家持歌は収載されていない。当該巻に集中している。こうした傾向は、題詞ばかりではない。歌表現の中に記されたモチーフを探すことも

うち霧らし雪は降りつつしかすがに我家の園にうぐひす鳴くも (8・一四四一)

春の野にあさる雉のつま恋に己があたりを人に知れつつ (8・一四四六)

ほととぎすなかる国にも行きてしかその鳴く声を聞けば苦しも (8・一四六七)

我がやどの花橋をほととぎす来鳴かず地に散らしてむと

か (8・一四八六)

ほととぎす思はずありき木の暗のなくなるまでになにか  
来鳴かぬ (8・一四八七)

いづくには鳴きもしにけむほととぎす我家の里に今日の  
みそ鳴く (8・一四八八)

ほととぎす待てど来鳴かずあやめ草玉に貫く日をいまだ  
遠みか (8・一四九〇)

卯の花の過ぎば惜しみかほととぎす雨間も置かずこゆ鳴  
き渡る (8・一四九一)

夏山の木末の繁にほととぎす鳴きとよむなる声の遙けさ  
(8・一四九四)

あしひきの木の間立ち潜くほととぎすかく聞きそめて後  
恋ひむかも (8・一四九五)

我がやどの花橋のいつしかも玉に貫くべくその実なりな  
む (8・一四七八)

我がやどの花橋は散り過ぎて玉に貫くべく実なりにけ  
り (8・一四八九)

隠りのみ居ればいぶせみ慰むと出で立ち聞けば来鳴くひ  
ぐらし (8・一四七九)

夏まけて咲きたるはねずひさかたの雨うち降らばうつろ  
ひなむか (8・一四八五)

我がやどのなでしこの花盛りなり手折りて一目見せむ児  
もがも (8・一四九六)

我がやどの尾花が上の白露を消たずて玉に貫くものにも  
が (8・一五七二)

ひさかたの雨間も置かず雲隠り鳴きそ行くなる早稲田雁  
がね (8・一五六六)

雲隠り鳴くなる雁の行きて居む秋田の穂立繁くし思ほゆ  
(8・一五六七)

雨隠り心いぶせみ出で見れば春日の山は色付きにけり  
(8・一五六八)

雨はれて清く照りたるこの月夜また更にして雲なたなび  
き (8・一五六九)

秋の野に咲ける秋萩秋風になびける上に秋の露置けり  
(8・一五九七)

さ雄鹿の朝立つ野辺の秋萩に玉と見るまで置ける白露  
(8・一五九八)

さ雄鹿の胸別けにかも秋萩の散り過ぎにける盛りかも去  
ぬる (8・一五九九)

山彦の相とよむまでつま恋に鹿鳴く山辺にひとりのみし  
て (8・一六〇二)

このころの朝明に聞けばあしひきの山呼びとよめさ雄鹿  
鳴くも (8・一六〇三)

と容易い。卷八に収載する歌を決定してゆく際に、題詞や歌  
に詠み込まれたモチーフが大きな判断基準になっている。

特に家持の場合、こうした景物を詠み込むことが季節歌と

向き合うことでもあった様子が、次の歌から顕著にうかがわれる。

大伴家持が秋の歌四首

ひさかたの雨間も置かず雲隠り鳴きそ行くなる早稲田雁  
がね (8・一五六六)

雲隠り鳴くなる雁の行きて居む秋田の穂立繁くし思ほゆ  
(8・一五六七)

雨隠り心いぶせみ出で見れば春日の山は色付きにけり  
(8・一五六八)

雨はれて清く照りたるこの月夜また更にして雲なたなび  
き (8・一五六九)

大伴宿祢家持が秋の歌三首

秋の野に咲ける秋萩秋風になびける上に秋の露置けり  
(8・一五九七)

さ雄鹿の朝立つ野辺の秋萩に玉と見るまで置ける白露  
(8・一五九八)

さ雄鹿の胸別けにかも秋萩の散り過ぎにける盛りかも去  
ぬる (8・一五九九)

このように季節への関心を深めていった家持が、題詞や歌に季節を感じさせるモチーフを手がかりに、歌を蒐集分類した様相をみてとることができる。

では、「題詞に季節のモチーフを詠み込んでいない家持歌」の用例はどのように考えるべきなのであろう。

橘朝臣奈良麻呂、集宴を結ぶ歌十一首

手折らずて散りなば惜しと我が思ひし秋の黄葉をかざし  
つるかも (8・一五八一)

めづらしき人に見せむともみち葉を手折りそ我が来し雨  
の降らくに (8・一五八二)

右の二首、橘朝臣奈良麻呂

もみち葉を散らすしぐれに濡れて来て君が黄葉をかざし  
つるかも (8・一五八三)

右の一首、久米女王

めづらしと我が思ふ君は秋山の初もみち葉に似てこそあ  
りけれ (8・一五八四)

右の一首、長忌寸娘

奈良山の峰のもみち葉取れば散るしぐれの雨し間なく降  
るらし (8・一五八五)

右の一首、内舎人県犬養宿祢吉男

もみち葉を散らまく惜しみ手折り来て今夜かざしつ何を  
か思はむ (8・一五八六)

右の一首、県犬養宿祢持男

あしひきの山のもみち葉今夜もか浮かび行くらむ山川の  
瀬に (8・一五八七)

右の一首、大伴宿祢書持

奈良山をにははす黄葉手折り来て今夜かざしつ散らば散  
るとも (8・一五八八)

右一首、三手代人名

露霜にあへる黄葉を手折り来て妹はかざしつ後は散るとも  
(8・一五八九)

右の一首、秦許遍麻呂

十月しぐれにあへるもみち葉の吹かば散りなむ風のまにまに  
(8・一五九〇)

右の一首、大伴宿祢池主

もみち葉の過ぎまく惜しみ思ふどち遊ぶ今夜は明けずもあらぬか  
(8・一五九一)

右の一首、内舎人大伴宿祢家持

以前は、冬十月十七日に、右大臣橘卿の旧宅に集ひて宴飲せるなり。

衛門大尉大伴宿祢稻公の歌一首

しぐれの雨間なくし降れば三笠山木末あまねく色付きにけり  
(8・一五五三)

大伴家持が和ふる歌一首

大君の三笠の山の秋黄葉今日のしぐれに散りか過ぎなむ  
(8・一五五四)

大伴宿祢家持が歌一首

高円の野辺の秋萩このころの暁露に咲きにけむかも  
(8・一六〇五)

右の用例は、題詞に季節の素材が明記されていなくても、傍線部で示したように、季節を感じさせる素材が詠み込まれ

ており、季節歌巻の雑歌に組み入れられたことが十分に理解できる。

「雑歌」に配置された歌として疑問が残るのが次の三例であらう。

A 巫部麻蘇娘子が鴈歌一首

誰聞きつこゆ鳴き渡る雁がねのつま呼ぶ声のともしくもあるを  
(8・一五六二)

大伴家持が和ふる歌一首

聞きつやと妹が問はせる雁がねはまことも遠く雲隠るなり  
(8・一五六三)

B 日置長枝娘子が歌一首

秋付けば尾花が上に置く露の消ぬべくも我は思ほゆるかも  
(8・一五六四)

大伴家持が和ふる歌一首

我がやどの一群萩を思ふ児に見せずほとほと散らしつるかも  
(8・一五六五)

C 大伴宿祢家持、娘子の門に到りて作る歌一首

妹が家の門田を見むとうち出で来し心も著く照る月夜かも  
(8・一五九六)

右の三例は、男女の贈答を感じさせる点で、「相聞」部に配置されてもよさそうな例といえる。

とはいえAは、一五六二番歌が雁の鳴き声に「つま呼ぶ声」を見出し、これを「ともし」と感じているところに恋情

を見出せなくはないが、和した家持は、一五六三番歌において、雁の鳴き声が遠く雲に隠れていることを詠い、娘子に向き合おうとしていない。題詞にも「鴈」をテーマにした贈答であることが明記されていれば、雑歌に入れていた理由を見出すことができる。

しかしBの題詞は、Aのような季節を感じさせる景物は記されていない。日置長枝娘子の一五六四番歌は「我は思はゆるかも」と自身の恋情を示す様相を呈している。巻十の「相聞」部に

秋の田の穂の上に置ける白露の消ぬべくも我は思はゆるかも  
(10・二二四六)

と類歌が見出され、当該巻の「相聞」部でも十分に受け入れられる内容を備えている。『万葉集私注』は「雑歌に入れたのは製作動機が、相聞でないことを知る家持のしたことであらうか」と指摘し、村瀬憲夫氏がこれを支持された。Bが当該巻の「相聞」部に組み入れられなかった理由を敢えて探してみると、後述するように「相聞」部の家持歌が題詞に贈答を明記していることが、Bとの差異として認められる。

またCに至ると、同様の題詞を持つ歌が

大伴宿祢家持、娘子の門に到りて作る歌一首

かくしてやなほや退らむ近からぬ道の間をなづみ参る来て  
(4・七〇〇)

と巻四「相聞」部にも見出される。こちらも敢えて差異を探すなら、七〇〇番歌の結句が「なづみ参る来て」と娘子に向き合おうとしているのに対し、Cは「照る月夜かも」と景に向き合おうとしているところであろう。詠み込まれた「照る月」に秋を見出すことができるなら、家持は、自身の知り得た作歌事情に加え、微妙なニュアンスの差異を区別しながら、当該巻に蒐集する歌を選び取っている様子をうかがい知ることができる。

そのいずれもが、家持にとっては季節分類する歌の中で、「雑歌」に位置すべき必然性を備えていたと考えられる。

### 三、「四季十相聞」の編集と家持

次いで「相聞」部に位置づけられた家持歌を考えてみたい。先の「雑歌」部に収載された家持関係歌は、多くの題詞に季節を感じさせるモチーフを記していたが、「相聞」部に同じ傾向を見つけることは難しい。わずかに

大伴宿祢家持、時じき藤の花と萩のもみてる  
と二つの物を攀ぢて、坂上大嬢に贈る歌二首

(8・一六二七〜二九)

を認めるばかりである。むしろ次の用例をみると、収載されているのが

①大伴家持、橘の花を攀ぢて、坂上大嬢に贈る歌一首へ并



せて短歌

(8・一五〇七〜〇九)

a へ大伴家持、紀女郎に贈る歌一首 (8・一五二〇)

b へ山口女王、大伴宿祢家持に贈る歌一首

(8・一六一七)

②大伴家持、姑坂上郎女の竹田の庄に至りて作る歌一首

(8・一六一九)

c へ大伴坂上郎女の和ふる歌一首 (8・一六二〇)

d へ坂上大嬢、秋稲の縵を大伴宿祢家持に贈る歌一首

(8・一六二四)

③大伴宿祢家持が報へ贈る歌一首 (8・一六二五)

へまた、身に着る衣を脱きて家持に贈りしに報ふる歌一首 (8・一六二六)

④大伴宿祢家持、時じき藤の花と萩のもみてるると二つの物を攀ぢて、坂上大嬢に贈る歌二首

(8・一六二七〜二九)

⑤大伴宿祢家持、坂上大嬢に贈る歌一首 へ并せて短歌

(8・一六二九〜三〇)

⑦大伴宿祢家持、安倍女郎に贈る歌一首

(8・一六三一)

⑧大伴宿祢家持、久邇の京より奈良の宅に留まれる坂上大嬢に贈る歌一首 (8・一六三二)

と、②を除いて、相手との贈答を意図して蒐集されている様子を見てとることができる。

渡瀬昌忠氏は、「人名十贈・報の類十歌何首」の題詞形式で記された歌を、「相聞」部の原形とみなされた。右の用例は、まさに渡瀬が指摘した通りの状況をみせている。歌の贈答が、蒐集のひとつの選択基準であったことは考えても良いように思われる。

ただし、題詞は書き留められた段階の内容が尊重される傾向にあることは、繰り返し述べてきたとおりである。当該巻のみがその方法を見無視して、題詞の統一を図ったとも考えがたい。原形部を考えるような判断基準にはなり得ないと考えている。②が「贈」の記述を持たないことを鑑みても、相聞歌という性格がもたらす結果的な状況と見ておいた方がよさそうに思う。

ここでは①〜④及びa〜dの歌表現に、もう少し目を向けてみよう。

①いかといかと ある我がやどに 百枝さし 生ふる橋  
玉に貫く 五月を近み あえぬがに 花咲きにけり 朝  
に日に 出で見るごとに 息の緒に 我が思ふ妹に ま  
そ鏡 清き月夜に ただ一目 見するまでには 散りこ  
すな ゆめと言ひつつ ここだくも 我が守るものを  
うれたきや 醜ほととぎす 暁の うら悲しきに 追へ  
ど追へど なほし来鳴きて いたづらに 地に散らさば  
すべをなみ 攀ぢて手折りつ 見ませ我妹子

(8・一五〇七)

望ぐたち清き月夜に我妹子に見せむと思ひしやどの橘

(8・一五〇八)

妹が見て後も鳴かなむほととぎす花橘を地に散らしつ

(8・一五〇九)

a なでしこは咲きて散りぬと人は言へど我が標めし野の花  
にあらめやも

(8・一五一〇)

b 秋萩に置きたる露の風吹きて落つる涙は留めかねつも

(8・一六一七)

② 玉梓の道は遠けどはしきやし妹を相見に出でてそ我が来  
し

(8・一六一九)

c あらたまの月立つまでに来まさねば夢にし見つつ思ひそ  
我がせし

(8・一六二〇)

d 我が業なる早稲田の穂立作りたる縵そ見つつ偲はせ我が  
背

(8・一六二四)

③ 我妹子が業と作れる秋の田の早稲穂の縵見れど飽かぬか  
も

(8・一六二五)

秋風の寒きこのころ下に着む妹が形見とかつも偲はむ

(8・一六二六)

④ 我がやどの時じき藤のめづらしく今も見てしか妹が笑ま  
ひを

(8・一六二七)

我がやどの萩の下葉は秋風もいまだ吹かねばかくそもみ  
てる

(8・一六二八)

⑤ ねもころに物を思へば言はむすべせむすべもなし

妹と我と手携はりて朝には庭に出で立ち夕

には床打ち払ひ白たへの袖さし交へてさ寝し夜

や常にありけるあしひきの山鳥こそば峰向かひ

につま問ひすといへうつせみの人なる我やなに

すとか一日一夜も離り居て嘆き恋ふらむここ思

へば胸こそ痛きそこ故に心和ぐやと高円の山

にも野にもうち行きて遊びあるけど花のみにほ

ひてあれば見ることにして偲はゆいかにして

忘るるものそ恋といふものを

高円の野辺のかは花面影に見えつつ妹は忘れかねつも

⑥ 今造る久邇の都に秋の夜の長きにひとり寝るが苦しき

⑦ あしひきの山辺に居りて秋風の日に異に吹けば妹をしそ  
思ふ

(8・一六三〇)

(8・一六三一)

右の用例は、波線を施したように結句を中心にして、相手への恋情を伝えることを歌の本旨と認めることができる。季節と景物は、傍線部で示したように、その恋情表現を導き出す役割を担う。その様子から卷八の「相聞」部は、はじめから季節詠として作られた歌を蒐集しているのではなく、季節をとめないながら詠まれた恋歌を中心に整理されている様相が認められる。

当該巻と卷三・四・六は同じ資料を用いていることが知ら

れている。四巻の中で、例えば紀郎女と家持の贈答歌を探すと、季節感の認められない歌は

紀女郎、大伴宿祢家持に贈る歌二首「女郎、名を小鹿といふ」

神さぶと否にはあらずはたやはたかくして後にさぶしけむかも  
(4・七六二)

玉の緒を沫緒に搓りて結べらばありて後にも逢はざらめやも  
(4・七六三)

大伴宿祢家持が和ふる歌一首

百歳に老い舌出でてよよむとも我は厭はじ恋は増すとも  
(4・七六四)

と、巻四の「相聞」部に配置されている。

また②cには、季節を感じさせる具体的な表現が認められないものの

大伴家持、姑坂上郎女の竹田の庄に至りて作る歌一首  
玉梓の道は遠けどはしきやし妹を相見に出でてそ我が来

し  
(8・一六一九)

大伴坂上郎女の和ふる歌一首

あらたまの月立つまでに来まさねば夢にし見つつ思ひそ我がせし  
(8・一六二〇)

右の二首、天平十一年己卯の秋八月に作る。

の如く左注の日付によって、秋の相聞に入るべき歌であると

判断していることを知られる。

家持にとって、巻八「相聞」部は、これまで作歌してきた女性との贈答歌の中から、季節を感じることでできる歌を中心に歌を蒐集して配置した。また、歌表現に直接季節を感じさせる詞句が見えない場合でも、歌が作られた日付から歌を巻八に配置したのであろう。ただし後者の方法は、日付が異なる場合もあり、あくまでも歌表現に季節を感じさせるモチーフを見出すことができなかった場合に用いる、二次的な方法であることを理解しておかねばなるまい。

## 結

巻八は季節分類を特徴にしているが、蒐集された家持歌をみている限り、「雑歌」部と「相聞」部とは、季節歌への関心も蒐集する基準も異なっていた。

季節歌の作歌から関心を深めて、季節歌巻の編纂を見通すなら、配列通り「雑歌」部が先に意識されたのであろう。

「相聞」部は「雑歌」部に比べると、残された相聞歌の中から、結果的な季節歌を集めた感覚が強い。

「挽歌」までを扱うには至らなかったが、「雑歌」「相聞」という伝統的な部立てに配慮しながら、季節歌の詠作の先に、新たな歌巻の編纂を意図したのが即ち当該歌巻であった。

家持は「雑歌」部に題詞が季節の景物を含んだり、歌表現が季節の景物を含む歌を蒐集していた。「相聞」部には恋歌の中に季節の景物が詠み込まれた歌を蒐集し、編集していた。

その編纂時期は、巻頭が志貴皇子歌にはじまることから、光仁朝まで引き下げる声もある。しかし、志貴皇子の評価は、子供達によって守られていたと考える筆者にとっては、光仁朝を待つ必要はない。天平十五年頃までの歌を蒐集している状況を顧みると、それから間もなくして編まれたと考えられる。

巻三・四・六と同じ資料で編まれた巻の中で、それはもつとも早く編み上げられた巻であったことを述べた次第である。

注

- (1) 近年の巻八に関わる編纂論は、中西進氏（『新万葉集の出版―『万葉集』巻八の形成―』『中西進 万葉論集』所収、昭和四十二年初出）が諸説を簡便に整理され、その上に氏が独自の論を展開されたのにはじまる。
- (2) 原田貞義氏「大伴坂上郎女圏の歌」『万葉集編纂資料と成立の研究』、初出は昭和五十九年。
- (3) 鈴木日出男氏「空間と時間―万葉の自然―」『上代文学』第七〇号。
- (4) 前掲（1）論文。

(5) 「万葉集巻八への投影」『渡瀬昌忠著作集 人麻呂歌集非略体歌論』上所収、昭和四十三年初出。

(6) 「万葉集の分類―巻八と巻十における「雑歌」と「相聞」―」平成七年初出。

(7) 前掲（4）論文。

(8) 横山英氏「万葉集巻三、四、六、八の関係」『万葉私考』所収。小野寛氏「万葉集巻八と巻三、四、六―その共通作者と重出歌―」。橋本達雄氏「万葉集の編纂と金村・赤人たち」『国語と国文学』。原田前掲（2）論文。塩谷香織氏「万葉集巻三・四・六・八」『万葉集研究』第十四集所収。橋本達雄氏「万葉集編纂の一過程」『万葉集研究』。四巻のうち巻六の編纂については、拙著『大伴家持論―文学と氏族伝統―』に、筆者の考え方と立場は明らかにしてある。

(9) 拙稿「万葉史上の志貴皇子」『万葉史を問う』。